

エッセイ

自己山林によるカラマツ住宅建設の顛末

谷 本 光 穂

定年が真近に迫った頃、定年後はスローライフを楽しもうと旭川市の隣町である比布町に、すぐ近くが水田になっている里山風の土地約0.5ヘクタールを準備した。その土地には樹齢が50年と60年で樹高30メートルの立派なカラマツの植林木が鬱蒼と繁っている。ちょうど神楽岡公園の中にいるような感じである。林の中に入ると、木の匂いが漂い、静けさと共に空気が澄んでいるような感覚になり爽やかなリラックスした気分になる。ストレスは解消され、NK細胞が確かに増えてくるといった感覚が実感される。近くに国道40号線が、反対側には高速道路（道央自動車道）の比布JCTもあるが、車の騒音は一切聞こえない。森林の周辺には、雪解け時期には可憐なカタクリの花が咲き乱れ、わらび、たらの目、ウドなど山菜がいくらかでもあり、私のような初心者でもすぐに目に付き、春先の山菜取りが実に楽しい。また、秋には落葉キノコが発生し、近郊からも大勢きのこ狩りに来ているようだ。このような環境に囲まれた場所に自宅建設を思い立った。まず、100本程のカラマツを伐採し敷地を確保した。伐採は近くの当麻森林組合にお願いした。しかし、カラマツは伐採してもすぐには建材として使えないこと、ねじれ、たわみなど癖があるので自然乾燥、強制乾燥をしなければならないこと、建築資材として使えるようになるには数年を要することなどを始めて知った。

しかし、上川総合振興局南部森林室（旧上川支庁南部森づくりセンター）や、上川支庁（当時）から十勝支庁（当時）へ転勤になった知人などから「新月伐採」という言葉を始めて知らされた。「新月伐採」とは冬の新月近くに伐採したカラマツ材は腐りにくい、暴れにくい、狂いがいなど長期乾燥等しなくても建材として十分使用可能となるそうだ。ヨーロッパの木こり達（特にドイツ、オーストリア）では昔からこの

ような智慧を持っているという話である。このような「新月伐採」法で生産された木材をノイモントホルツ（Neumond holt）と呼んでいる。私は一昨年12月の新月一週間前に「新月伐採」し、その効果を納得すべく、このホルツの小片の試料を道立林産試験場（西神楽）に持ち込み同森林室と同試験場共同で、ヤング率、含水率の測定をした。翌年の夏、更に伐採しその小片も比較のため測定を行った。含水率の結果は、平均（芯材と辺材）49%減っていたことが分かり、素晴らしい方法だと感心もし、納得もした。

さて、この伐採した原木を製材しなくてはならない。それにしても、自己山林のカラマツを使ってマイホームを建てるなんて、なんとも贅沢であり、また、気持ちのいいものだ。しかし、残念ながらカラマツを専門に製材、乾燥し建材として供する施設は旭川近郊には皆無であることがわかり、すっかり慌てた。同森林室からの助言もあって製材は上富良野の製材所で賃挽き（他人の木材と区別するために製材装置を借り切っていく）、人工乾燥は帯広の製材所で同様に乾燥釜を借り切っていく。

外国産の材木は安価に手に入るが、今回は地産地消に拘った。地産地消といえば、農業分野でよく言われているが、これはフード・マイレージ（FM）つまり、食材の重量×移動距離の数値が小さいほうがエコロジ的に優しいとされている。実は、林業分野でも同様の概念があり、ウッドマイレージ（WM）というものがある。これは、材木重量（トン）×移動距離（キロメートル）で定義されるようである。この量は、物理学では仕事量に相当する。つまり、移動する前にこの材木は消費するのにこれだけのエネルギーを持っているということの意味する。当然、この数値が小さいほうが環境やエコロジ的には望まれる。従って外国産の木材の利用よりも国内の材木の利用を推奨する

し、地元のものの方がより環境に良いというわけである。私の場合は地産地消というよりも、自産自消のほうが適切であろうし、WMの値は相当小さくなることになる。私が自前のカラマツ材に拘った理由は実はここにあるのである。昨年は、同森林室主催のフォーラムで“自己山林を活用したカラマツ住宅建築への挑戦”と題して熱く喋ったりした。

カラマツの家には不思議な魅力がある。それは、木目の美しさや独特の匂いかもしれないし、あるいは、木のもつ吸湿放湿のせいかもしれない。でもやはり自然な素材だからだと思う。カラマツは「ねじれやすい」「ヤニが多い」と言われており、一昔前まで、住宅建材には向かないとされ、ほとんどのカラマツ材は「梱包材」や「パレット」としてしか使われていなかったが、現在では人工乾燥技術の発達により住宅建材としても用いられるようになってきている。しかし、その製材技術は旭川近郊では十勝地方が非常に充実しており、上川地方はまだ遅れているようである。それにしても「仕事量」とか「エネルギー」、「ポテンシャル」といった量の概念については、あまり理解されていないようである。例えば「エネルギー」は「力」であるとか「エコ」とは「節約」であるといった程度の理解の仕方のようなのである。エコポイントとかエコ住宅とか「エコ」という言葉は氾濫しているが、皆さん結構深く考えるのが苦手ようで、若いときの科学教育が如何に大切かと切実に感じた。特にエネルギーとかポテンシャルとは何かを十分理解することが大切であると感じていた。今年の春、旭川西高校の先生よりこの度文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校になったので物理の講義を担当して欲しいという要請があった。この事業は理数系教育の充実と国際性を育てることを目的としており、全て英語のテキストを使用、例えば数学や生物、化学ではそれぞれ「SS mathematics I」、「SS biology I」、「SS chemistry I」という科目名になっている。しかし、物理では「SS energy I」で、physicsではなくenergyになっている。先生の話から、特に「エネルギー」に的を絞って講義して欲しいという要望であった。私はこれ幸いと快く引き受けたわけである。講義の初日は「なぜ世界一でなきゃダメですか?」、「二位じゃダメですか?」今ではすっかり有名になったこのフレーズをテーマに科学とは何か、科学者の研究に対する姿勢等について討論したり、日本の

ノーベル賞受賞者の話をしたりしてスタートし、現在結構楽しくやっている。講義を通じて、「エネルギー」の概念が正しく理解されるよう講義内容の改善や教材開発など、いま、頭をひねりつつ奮闘している。

さて、カラマツ住宅の話に戻るが、私の身内の不幸や、建設を手がけてくれことになっていた工務店の社長さんが亡くなったこと、地盤調査の結果から想定外のかかなりの補強をしなければならなくなったことなどが重なり、地鎮祭の準備までしたけど残念ながら計画を断念する羽目になってしまった。まさに青天の霹靂、真夏の世の夢となってしまった。しかし、軟弱な地盤でも小さな規模なら大丈夫だろうと思い、簡単なコテージを建てることに変更した。カラマツの建材はふんだんにあるので、オールマイカラマツ100%を目指して建てることにした。垂木（たるき）、貫（ぬき）、胴縁（どうぶち）といった壁（珪藻土などの内壁や外板壁）の下地部分もカラマツ材を使用、更に玄関ドアもマイカラマツで作ってもらうことにした。また、シックハウスからの被害を避けるために建材は全て無垢材を使用することになっている。今やっと着工にこぎ着け、今年の初冬には完成をみる予定である。

ところで、「新月伐採」の効果を調べるために西神楽にある道立林産試験場の協力によって、建材の強度、含水率など様々な測定をしたわけであるが、試験をするにあたって試験場職員である若い木材の研究者と連絡を取ったとき、その研究者は「新月伐採」効果については非常に懐疑的に考えているようで、話が食い違うこともしばしばあった。

研究者は常に旺盛な知的好奇心をもって、そして、社会的要請が何処にあるかを常に考えながら問題を取り上げ、その問題解決によって社会的貢献の効果を見定め、努力してもらいたい。研究で解決したことは氷山の一角で、真実はまだまだ闇の中ということも自覚してもらいたい。特に、若い研究者にはこのような努力を精一杯してもらいたいし、そのような努力が出来る環境を周りのものは是非作ってあげてほしいと切実に思っている。

今後数年かけて、生まれてこの方一度も経験のない枝打ちや下草刈などを行い、カラマツ林をゆっくりと楽しみながら整備し、快適なスローライフを思いっきり楽しもうと思っている。